運動の楽しさや喜びを味わう体育科の学習指導法に関する研究
－「ティーボール」の課題解決的な学習を通して－

広島市立落合東小学校教諭　　清　水　　剛

Ⅰ　研究主題設定の理由

近年，子どもたちの体力の低下や運動離れが指摘されている。そのため，日常生活の中で積極的に運動を取り入れたり，生涯にわたって運動やスポーツを実践したりすることの必要性が唱えられている。このような状況の中，学校体育の果たす役割は大きく，体育科の学習を通して，運動に親しむ資質や能力を育てることが重要であると思われる。

その運動に親しむ資質や能力を育てるためには，児童がしっかりと運動の楽しさや喜びを味わいながら学習に取り組んでいくことが大切である。

しかしながら，これまでの体育科の学習を振り返ってみると，運動やスポーツに対する苦手意識が強いために進んで運動に取り組めない，運動技能を他人と比較して劣等感をもつ，友達からできないことを叱責されたり注意されたりして疎外感をもつなどの理由から運動の楽しさや喜びを味わうことができていない児童の実態があったように思う。

そこで，本研究では体育科の学習において，児童一人一人が運動の楽しさや喜びを味わうことができる学習指導法について授業実践を通して探ることとする。

Ⅱ　研究の方法

児童が運動の楽しさや喜びを味わうために必要な手だてを具体化し，授業実践を通して，手だての有効性について分析・考察を行う。

Ⅲ　研究の内容

1　研究主題に関する基礎的研究

(1) 運動の楽しさや喜びを味わうことと体育科の目標との関連性

『小学校学習指導要領解説　体育編』には，体育科の目標として，

> 心と体を一体としてとらえ，適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して，運動に親しむ資質や能力を育てるとともに，健康の保持増進と体力の向上を図り，楽しく明るい生活を営む態度を育てる。

と示されている。そして，運動に親しむ資質や能力を育てるためには，「児童の能力・適性・興味・関心等に応じて，運動の楽しさや喜びを味わい，自ら考えたり工夫したりしながら運動の課題を解決するなどの学習が重要である。」と記されている。

そこで，運動に親しむ資質や能力を育てるためには，自ら考えたり工夫したりしながら運動の課題を解決する学習（課題解決的な学習）を進めることによって，一人一人の児童に応じた運動の楽しさや喜びを味わうことが必要であると考える。

(2) 運動の楽しさや喜びを味わうとは

体育科では，運動の能力，興味・関心等の実態が異なる児童が，一緒になって学習を進めていかなければならない。そのような状況の中で，すべての児童に運動の楽しさや喜びを味わわせるためには，運動ができた，または競争に勝ったという楽しさや喜びのとらえ方だけではなく，より多面的に楽しさや喜びをとらえることができるようにすることが大切であると思われる。

高田典衛は，子どもが体育科の学習を楽しいと感じ，心から喜ぶ要因として，「動く楽しさ」「解る楽

しさ」「伸びる楽しさ」「集う楽しさ」（本研究では「解る楽しさ」を「分かる楽しさ」,「集う楽しさ」を「かかわる楽しさ」と表記する。）の四つをあげている（表１）。

表１　運動の楽しさや喜びを味わう要因

動く楽しさ	自ら体を動かそうという気持ちになったり，力一杯運動することができたりしたと感じること。
分かる楽しさ	課題意識をもち，課題の解決に向けて運動したり考えたりする中で，新たに感じたり，分かったりしたことがあったと感じること。
伸びる楽しさ	運動ができた，技能が上達した，体力を高めることができたと感じること。
かかわる楽しさ	集団内でお互いに教え合ったり，励まし合ったりすることができたと感じること。

一人一人の児童が「動く楽しさ」「分かる楽しさ」「伸びる楽しさ」「かかわる楽しさ」(以下「四つの楽しさ」という。)を実感することが,運動の楽しさや喜びを多面的にとらえることになり,そのことが運動に親しむ資質や能力を育てることにつながると考える。

(3)　「四つの楽しさ」を実感するための課題解決の過程と指導の手だて

本研究では，児童が「四つの楽しさ」を実感するためには課題解決の過程で次のことが必要であるととらえた。

○　自分にもできそうだ，やってみたいという意識をもつこと。

○　今よりも上手になりたい，できるようになりたいという意識をもつこと。

○　どうしたらできるようになるのだろうかという課題意識をもつこと。

○　課題解決に向けてヒントとなる情報や，課題意識を持続させる力を与えてくれるような友達とのかかわりをもつこと。

また，上記のことを児童が意識して活動できるようにするために必要な手だてを次のようにとらえた。

○　児童の運動経験や興味・関心を考慮した教材教具やルールを工夫すること。

○　今，もっている力を明らかにし，自分なりの到達目標をもつことができるような活動の場を工夫すること。

○　自分なりの運動のイメージをもつことができるような学習活動や資料を工夫すること。

○　どのようなかかわり方が良いのかを方向付け，かかわりを活発にするような教師の支援を工夫すること。

以上のことを教師が意図的・計画的に行うことによって課題解決が促され，児童が運動の楽しさや喜びを味わうことができると考える。

２　授業実践と結果の分析・考察

(1)　授業実践の指導計画

広島市立Ａ小学校第５学年を対象に「ティーボール」の単元の指導計画を作成し，平成 16 年 10 月 12 日～ 11 月 12 日に授業を実施した（表２）。

表２　学習指導計画

時	主　な　学　習　活　動
第１時	**ティーボールのやり方やルールを知ろう** ・オリエンテーション （学習計画・チーム分け・ルール） ・ティーボールサーキットの場で，今もっている力を確かめる。
第２時	**遠くに打つにはどうすればいいだろう** ・ティーボールサーキットの場でチームごとに活動する。 ・本時の課題を確認し，課題解決に向けてチームごとに活動する。 ・気付いたことを発表し，学級全体で共有する。
第３時	**みんなが安心してプレーするためには，どんな行動や声かけをすればいいだろう** ・ティーボールサーキットの場でチームごとに活動する。 ・チームごとに課題を確かめ，ゲームをする。 ・ゲームを振り返り，記録をする。
第４時	**遠くへボールを投げるにはどうすればいいだろう** ・ティーボールサーキットの場でチームごとに活動する。 ・本時の課題を確認し，課題解決に向けてチームごとに活動する。 ・気付いたことを発表し，学級全体で共有する。
第５時	**みんなが安心してプレーするためには，どんな行動や声かけをすればいいだろう** ・ティーボールサーキットの場でチームごとに活動する。 ・チームごとに課題を確かめ，ゲームをする。 ・ゲームを振り返り，記録をする。
第６時	**相手の得点を少なくするためにはどんな作戦を立てたらいいだろう** ・ティーボールサーキットの場でチームごとに活動する。 ・本時の課題を確認し，課題解決に向けてチームごとに活動する。 ・気付いたことを発表し，学級全体で共有する。
第７時	**みんなが力を発揮するためにはどんな行動や声かけをすればいいだろう** ・ティーボールサーキットの場でチームごとに活動する。 ・チームごとに課題を確かめ，ゲームをする。 ・ゲームを振り返り，記録をする。
第８時	**ティーボールの学習を振り返って学習の成果を確かめよう** ・ティーボールサーキットの場でチームごとに活動する。 ・チームごとに課題を確かめ，ゲームをする。 ・単元を振り返り，成果を確かめる。

また，本単元において，児童が四つの楽しさを実感できるようにするための具体的な指導の手だてを

次のように考えた。

具体的な指導の手立て

【教材・教具の工夫】
○　ソフトボール（投手が投げたボールを打つ）という教材をティーボール（ティーに置いたボールを打つ）という教材にすることで，運動経験の少ない児童にも「できそうだ」という意識をもたせる。
○　新聞紙を丸めたボールや段ボール箱を使って多様な活動を仕組むことで，「やってみたい」という意識をもたせる。

【ルールの工夫】
○　三振は無し。ボールに当たるまで何回空振りしてもよい。一回の攻撃は，チームの全員が一度ずつ打席に立って終了する。その後，攻守を交替する。以上のようなルールを設定することで一人一人が活動できる場が確保され「力一杯やった」「できた」という実感をもたせる。
○　得点は一塁打で１点とする。二塁打で２点，三塁打で３点とすることで「できた」「上手になった」という実感をもたせる。

【活動の場の工夫】
○　基礎となる「打つ」「投げる」「走る」技能を身に付けるためにチームごとに活動できるように六つの場（ティーボールサーキット）を設定し記録を得点化することで「今よりも上手になりたい」「できるようになりたい」という意識をもたせる。
＊ティーボールサーキットとは，以下のような場である。
・新聞紙バッティング：ティーに置いた新聞紙を丸めたボール（２カ所）を打ち，遠くへ飛ばす場
・ストラックアウト：ボールを決められた的に当ながら，徐々に投げる位置を的から遠くする場
・段ボールバッティング：丸椅子の上に置いた段ボール箱を打って遠くへ飛ばす場
・ボール回し：チームで二つに分かれ，ベース間の距離に離れてキャッチボールをしながら，全員でボールを回して時間を計測する場
・ベースランニング：ベースを一人１周しながらチームでリレーをし，時間を計測する場

【学習活動や資料の工夫】
○　課題について自己の経験を振り返る→実際にやって確かめる（視点を明らかにする）→感じたことを言葉で表現する。という過程を経ることによって運動のイメージをもたせ「分かった」という実感をもたせる。
○　「打つ」「投げる」運動場面を「はじめ」「なか」「おわり」の３場面に分けて考えることができる図と書き込みができるシートを活用することで見る視点を明らかにし，運動のイメージをもたせ「分かった」という実感をもたせる。

【教師の支援の工夫】
○　教師が，どのようなかかわり方をすれば良いのかを方向付けるような声かけをすることで，友達とのかかわりをもたせる。
○　よいかかわり方をしている児童の感想を取り上げ，授業のはじめに紹介し賞賛することで，友達とのかかわりをもたせる。（よいかかわり方とは：動きや要領を教える，ほめたり，認めたりする，励ますなどのかかわりを指す）

(2) 分析の方法

ア　児童の振り返りカードの集計結果を拠り所にして「四つの楽しさ」を実感しているかを分析する。

イ　児童の記録や感想をもとに，「四つの楽しさ」を実感しているかを見取る規準を拠り所にして児童を見取り，指導の手だてが有効であったかを考察する。

ウ　運動に苦手意識をもっている児童を抽出し，児童の感想をもとに，「四つの楽しさ」を単元を通してどのように実感しているかを見取り，指導の手だてが有効であったかを考察する。

表３は，課題解決において，「四つの楽しさ」を実感しているかを見取るための規準である。

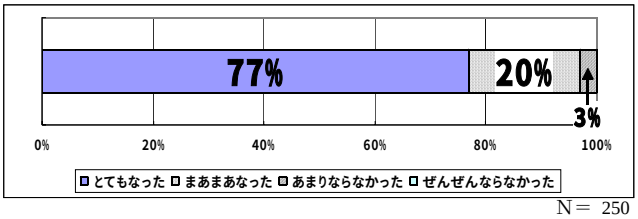
表３　課題解決における楽しさを実感しているかを見取る規準

楽しさ	もつであろうと思われる意識	実感したと思われるつぶやきや記述
動く	・自分にもできそうだ ・やってみたい	・全力でやった ・力一杯やった ・また，やりたい ・次はこうしたい ・もっと○○したい
分かる	・どうしたらできるようになるのだろう	・分かった ・大切なのは○○だと思った ・発見した
伸びる	・できるようになりたい ・今より上手になりたい	・上手になったと思う ・できるようになった ・前よりもできた
かかわる	・みんなで仲よく運動したい ・みんなで協力したい	・励ましの声をかけることができた ・励まし声をかけてもらって嬉しかった ・教えてあげることができた ・教えてもらって嬉しかった

(3) 分析・考察

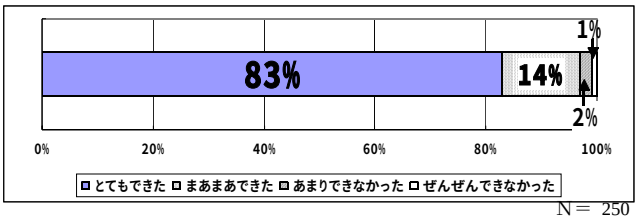
(2)で示した分析の方法に従って「四つの楽しさ」を実感しているかを分析・考察する。また，運動に苦手意識をもっている児童について分析・考察する。

ア　「動く楽しさ」を実感することができたか



N＝ 250

図１　自分から進んで体を動かそうという気持ちになったか



N＝ 250

図２　力一杯運動できたか

図１と図２は第１時から第８時までの各時間終了後に児童が学習を振り返って記入した結果を集計したものである。図１の「自分から進んで体を動かそうという気持ちになったか」では，「とてもなっ

た」「まあまあなった」と答えた児童の割合は 97 %になっている。また，図２に示した「力一杯運動できたか」では，「とてもできた」「まあまあできた」と答えた児童の割合は 97 %になっている。

これらのことから，大部分の児童が「動く楽しさ」を実感していることが伺える。

そこで，このような結果が得られた理由を児童の感想から考察する。

第１時における児童の感想
（ソフトボールの運動経験のない児童の感想から抜粋）

A児
体育はできるかなぁと思ったけど新聞紙バッティングが結構できて嬉しかった。ティーボールの点の取り方が分かった。野球と違っていていいなあと思った。またやりたい。

B児
前までは，遠くまで投げられなかったけど，先生のおかげでボールが的に当たるようになったのでとても良かった。早く体育がやりたくなってきた。ありがとう。

C児
自分の記録を伸ばして自信を高めることができた。次は何をするのかな？自分の記録を伸ばせるといいな。

D児
すごく楽しかったし，ベースランニングはタイムが早くなって良かった。特に新聞紙バッティングが楽しかった。またやりたいなと思った。

A児は，運動に苦手意識をもっていたが，ティーボールのやり方やルールを工夫したことで「できるだろうか」という不安が取り除かれ，「またやりたい」という気持ちをもてている。B児とC児は，記録を得点化するという活動の場の工夫により，「できた」という思いをもつことで，「早くやりたい」という意識や「次は何をするのかな」という期待感をもっている。D児は，ティーボールサーキットという場を工夫したことで，運動への興味をもち「またやりたい」という気持ちをもてている。

これらのことから，これまでバットを用いてボールを打つという運動経験の無い児童にも教材・教具や活動の場の工夫が「動く楽しさ」を実感させるために有効に機能したと考えられる。

イ　「分かる楽しさ」を実感することができたか

ここでは第４時の学習をもとにして分析・考察をする。

図３と図４は，第４時終了後に児童が学習を振り返って記入した集計結果である。図３の「めあてが達成できたり，課題を解決することができたか」では，「とてもできた」「まあまあできた」と答えた児童の割合は 94 %であった。また，図４の「新しく知ったり，分かったりしたことがあったか」では，「とてもあった」「まあまああった」と答えた児童の割合は 97 %であった。

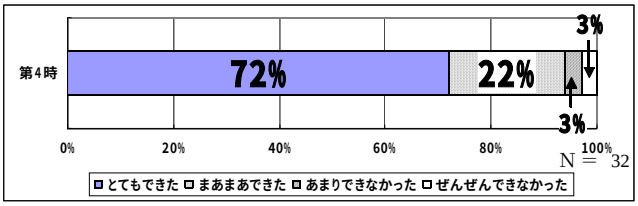


図３　めあてが達成できたり，課題を解決したりすることができたか（第４時）

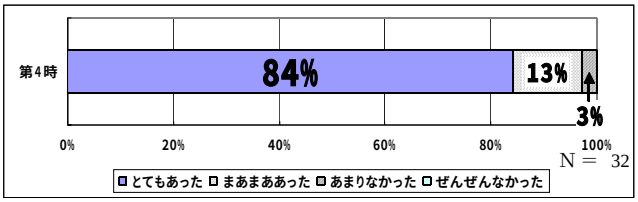


図４　新しく知ったり，分かったりしたことがあったか（第４時）

これらのことから，第４時において児童は「分かる楽しさ」を実感していることが伺える。

そこで，このような結果が得られた理由を児童の学習シートへの記述をもとに考察する。

第４時では学級全体で「どうしたら遠くへ投げることができるだろうか」という課題を設定し，授業を進めた結果，図５に示したように，学習前と学習後を比べると，児童の運動に対するイメージが広がったことが読み取れる。

学習前の児童は，運動イメージをおおまかにしかとらえていないため，「足の踏み出し」「腕の振り」「視線の方向」ということにしか気付いていなかった。また，どのようにすればうまくできるのかを考えて発表させたが，動きに対する表現も曖昧であった。

しかし，学習後では，新たに「腰の回転」に気付いている。また，「腕」「手首」の動きについては「腕」「肘」「手首」と視点が広がり，ただ振るという曖昧な表現が各部位の動きに着目して，具体的に動き

学習前		学習後		
はじめ		はじめ	・的に集中する ・顔を投げる方に向ける ・足を上げる	・肘を曲げる ・ボールの持ち方を工夫する
なか	・力を入れて足を前に踏み出す ・腕を振る ・手首を振る ・的に集中して投げる	なか	・腰を回す，ひねる ・最後に手首を振る ・投げる方向に足先を向ける ・腕は円を描くように回す	・できるだけ後ろに腕をひく ・足を前に踏み出す ・肩を回す ・斜め上に向かって投げる
おわり		おわり	・腕を思い切り振る ・手をひねる	・腕を最後まで振り終わる ・ボールを投げた先を見る

図５　学習前と学習後における児童の運動イメージの変容

をイメージできるような表現になっている。

これは，自己の運動経験を振り返って思考する活動が，「どうしたらできるのだろうか」という課題意識を明確にすることにつながり，運動場面を「はじめ」「なか」「おわり」という３場面の図にして表し，運動して感じたことを図の中の体の部位に書き込めるという学習資料の工夫が運動を見る視点を明確にし，運動を具体的にイメージすることに有効であったと考える。さらに，各自が表現したことを学級全体に広げることで，新たな運動イメージに気付いたり，友達へのアドバイスができたりする場面も見られた。

これらのことから,学習活動や学習資料の工夫が,「分かる楽しさ」を実感させるために有効に機能したと考えられる。

ウ　「伸びる楽しさ」を実感することができたか

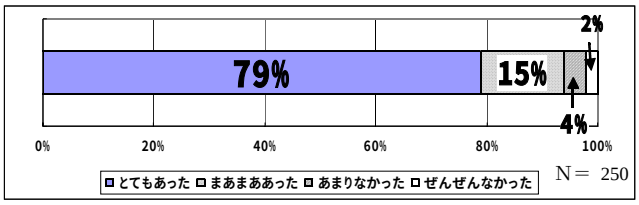


図６　できなかったことができるようになったり，上手にできるようになったりしたことがあったか

図６と図７は，第１時から第８時までの各時間終了後に児童が学習を振り返って記入した結果を集計したものである。図６の「できなかったことができるようになったり，上手にできるようになったりしたことがあったか」では，「とてもあった」「まあまあった」と答えた児童の割合は，94 %である。

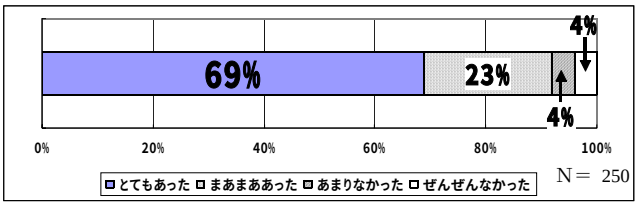


図７　自分の体力を高めるのに役立ったと思うことがあったか

また，図７の「自分の体力を高めるのに役立ったと思うことがあったか」では，「とてもあった」「まあまああった」と答えた児童の割合は 92 %である。

これらのことから，大部分の児童は「伸びる楽しさ」を実感していることが伺える。

そこで，このような結果が得られた理由を児童の感想から考察する。

「伸びる楽しさ」を実感している児童の感想

○　今日は２点とった。とても嬉しかった。次は４点目指して頑張りたい。
○　初めて段ボールバッティングで２点取れた。打つ場所とバットのもつ位置を変えたら打てた。ボール回しでも新記録を出せた。
○　ストラックアウトで６点とれた。前は２点だったのに。自分でもすごいと思った。「がんばれ」「ファイト」と声もかけた。すごく嬉しいと思った。また声をかけられたらいいな。
○　段ボールの時，前は３,４点だったけど今日は５点も取れたのですごく嬉しかった。
○　試合で１点しか取れなかったけど，今日は５点も取れて嬉しい。投げるのも前は的に当たらなかったけど今日は当たった。ティーボールがうまくなって良かった。

「伸びる楽しさ」を実感している児童の感想では，どの児童も数値（得点）を示しながら，できるようになったことを実感したり，次の目標を設定したりしていることが読み取れる。

ティーボールサーキットという多様な活動を設定し記録を得点化するという工夫が，他人との比較ではなく前の時間の自分の記録と比較して「できた」「上手になった」ということを実感することにつながっている。また，試合における得点を１塁打で１得点にするというルールの工夫により１塁打でもチームの点数に貢献できたと実感することができ，そのことがもっとできるようになりたいという意識につながり，自分なりの目標を設定することができたと推察される。

これらのことからティーボールサーキットという活動の場の工夫やルールの工夫が「伸びる楽しさ」を実感することに有効に機能したと考えられる。

エ　「かかわる楽しさ」を実感することができたか

図８と図９は第１時から第８時までの各時間終了後に児童が学習を振り返って記入した結果を集計したものである。図８の「友達と力を合わせることができたか」では,「とてもできた」「まあまあできた」と答えた児童の割合は 87 %になっている。また,

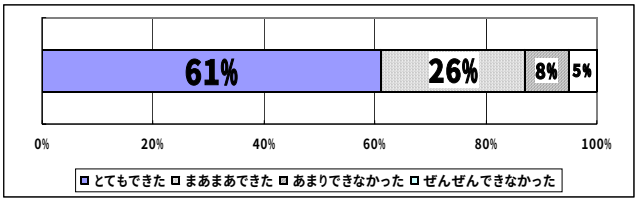


図８　友達と力を合わせることができたか

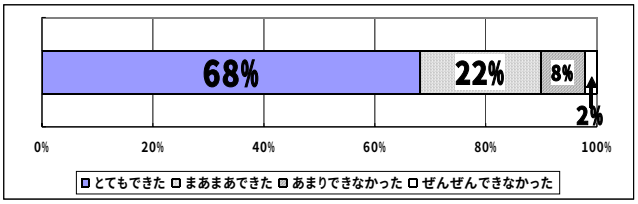


図９　友達に教えたり，励ましたり，応援したりすることができたか

第７時のＳチームの感想

Ｊ児	今日はやる気をなくしていたので楽しくなかった。
Ｋ児	今日はチームワークが高まっていなかった。
Ｌ児	次の体育は楽しくみんなで協力し合う。④
Ｍ児	今日分かったことは自分のチームだけじゃなく相手のことも考えてあげないといけないなぁ。②④

（①＝動く　②＝分かる　③＝伸びる　④＝かかわる）〇数字はそれぞれの楽しさを実感していると思われる記述

図10　Ｓチームの第７時と第８時の感想の変化

オ　運動に苦手意識をもつ児童は四つの楽しさを実感することができたか

表４は，運動に苦手意識をもっているＰ児の第１時から第８時までの感想である。

第１時から第３時までは「動く楽しさ」「分かる楽しさ」「伸びる楽しさ」を多く実感している。

これは自分の力に合った運動の場を選択して取り組むことができたことによって「できた」ことを実感し，そのことが次の活動への意欲につながったものと考える。特に第３時の感想では，できないことを克服するために進んで練習しようという気持ちが生まれてきていることがうかがえる。

第４時以降は，「教えてもらった」「励ましてもらった」ことで嬉しさを感じている記述が多くなっている。

これは，教師が「かかわる楽しさ」を実感している児童の感想を全体の場で紹介して賞賛したり，よいかかわりができている児童を見つけて賞賛したりすることによって，具体的にどんな言葉や行動をすればよいのかということが分かったり，かかわり方を方向付けたりすることができた結果であると思われる。

特に，第８時の感想の中には，勝った負けたという結果だけではなく，チームの仲間と運動することに楽しさを見いだしている記述も見られる。

これらのことから，運動に苦手意識をもつ児童も単元を通して「四つの楽しさ」を実感していることが推察される。

Ⅳ　成果と課題

研究主題に迫るために授業実践を通して「四つの楽しさ」を実感することができたかを分析・考察した結果,以下のような成果と課題が明らかになった。

１　成果

○　児童の運動経験や興味・関心を考慮した教材の工夫やどの児童にも活動の場を確保するようなルールの工夫により単元の種目に対する運動経験のない児童にも「動く楽しさ」を実感させることができた。

○　課題意識を明確にさせたり，運動を見る視点を明らかにさせたりするための学習活動や資料の工夫により児童がとらえる運動のイメージが広がり，「分かる楽しさ」を実感させることができた。

○　自己の技能を客観的に数値で測ることができるような活動の場の工夫や自分もチームに貢献できたと感じられるようなルールの工夫により，自分なりに目標を設定することができ，その目標を達成することで「伸びる楽しさ」を実感させることができた。

○　かかわり方を方向付ける教師の声かけや賞賛により児童相互のかかわりが活発になり，「かかわる楽しさ」を実感させることができた。

２　課題

○　今回の研究では,課題を解決する学習によって,児童が多面的な運動の楽しさを味わうことができるということが明らかになったが，個々の児童の課題を教師が把握し，適切に助言できるような支援の在り方を考えることが課題である。

○　児童相互のかかわりが運動の楽しさや喜びを味わわせるための重要な要因の一つであることが明らかになったが，運動技能に関する教え合いなどのかかわりを活発にするような教師の支援についてさらに考えていきたい。

○　本単元では，「四つの楽しさ」を実感することができたが，運動に親しむ資質や能力を育てるためには，他の単元においても多面的な楽しさを実感することが必要である。今後も研究を続けていきたい。

参考文献

①　小林篤『体育の授業研究』　大修館書店　1978

②　高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖『体育科教育学入門』　大修館書店　2002

③　文部省『小学校学習指導要領解説　体育編』　東洋館出版社　2001